

＜定例研究会報告要旨＞

第 1588 回 (11 月 9 日)

コートディヴォアールの水稲作

合 田 素 行

西アフリカに属するコートディヴォアールでは、灌漑稲作が食料自給策の最大の柱として進められようとしており、日本の積極的な支援が求められている。本報告は、こうした要請にこたえ、この援助の今後の方向を探ることを目的として同国に 2 ヶ月派遣され、そこで得られた回答の一部である。実態調査はほぼ一月にわたり、全国約 15 程度の灌漑水田を行っている村への訪問、村長あるいはおもだちおよび 70 農家へのヒアリングを行った。

この国では、米は陸稲が約 40 万 ha が主として焼き畑によってほぼ自給用に栽培されてきた。しかもミレット、とうもろこし、キャッサバ、バナナ等が生産量も多く、米は少なくとも補助的な栽培植物であった。しかし食習慣の変化、人口増とそれにより一層拍車のかかった都市化の進展による都市部の急激な米の需要増は輸入により対処せざるを得ず、それは独立後の経済成長をもたらしたコーヒー、カカオの価格低迷とともに莫大財政負担となって、ますます大きな政治的、財政的問題となってきたのである。政府は 20 年前ほどから灌漑稲作のプロジェクトを進めてはいたが、こうした背景から本格的な稲作振興作にとりかかることとなったのである。現在灌漑水田は 2 万 ha ほどである。

灌漑稲作を導入定着するにあたっては、基本的に考慮すべき点がいくつかある。第一は気候的、地形的に灌漑投資が効率よく可能かどうかという点、第二は、水管理が可能であるかどうか、という点である。コート・ディヴォアールにおいては前者についてはとりあえず問題がない。しかし後者については多く

の問題を見いだすことができた。水田が農家の人々にまだまだなじみが薄いことは基本的な問題としてあるが、水管理に必要な技術、そしてそれを圃場全体で管理せざるをえないために必要な水利組織の未発達は明らかであった。

しかし水田稲作の歴史のないこの国にとってこのことはいわば当然であって、それは様々な援助の形態の中で、この国なりに問題の解消を図っていけばよいのだが、いま述べた水田稲作の 2 つの基本的な条件とは別に、もっと基本的な点、おそらく農家において「経営」の観念の非常に希薄なことが指摘されなければならない。この点は歴史的な説明が可能だと思われる。

19 世紀後半以降の全面的植民地化はコート・ディヴォアールにおいては、コーヒー、カカオ等の輸出農産物のいわばプランテーション型農業が積極的に進められた。この農業においては、経営者が農家を雇用し、総体的に栽培の単純な作物であることもあって、苗つけから収穫までわかりやすい一定の作業がパッケージの形でマニュアルに沿って行わせる、という形態をとる。単純化すれば、農家はそれに半年ほどの労働をあてて現金収入を得、食糧は村の周辺の畑で自給農業によって得るというサイクルを毎年繰り返していたと考えられる。ここには農家がみずからの農業を経営として据え、行動する契機はほとんど見られない。

こうした農家に水稲作を導入する一番の近道は政府の灌漑水田プロジェクトによるプランテーション型稲作である。しかし統治能力、財政力の欠如もさることながら、何といっても農家の人々の自立が第一であるからには、問題は容易ではないのである。